



→このところ暖かい日が続いている。3月下旬の気候だという。暖かいのはそれはそれでいい。問題なのはその後の気候だ。去年の夏のように猛暑にならなければいいかと気にかかる。江戸川の刷毛で塗っおうに、のっぺりとしていた。



↑1867年、徳川幕府の名代としてパリ万博に徳川昭武は、幕府崩壊後、松戸市に屋敷をかまえ、狩猟をし、写真を撮影しながら、のんびりと暮らした。

小さな旅の話。ときは大正時代。夏目漱石は一日、矢切に遊んだ。

以下は『彼岸過迄』の抜粋。

「この日彼らは両国から汽車に乗って鴻の台の下まで行って降りた。それから美しい広い河に沿って土堤の上をのそのそ歩いた。」

鴻の台とはいまの市川市国府台（こののだい）のことだ。それから土手伝いに出たとすれば、江戸川の左岸を歩いたと考えられる。

「敬太郎は久しぶりに晴々した好い気分になって、水だの岡だの帆かけ船だのを見廻した。」

岡は丘のことだろう。東京側には丘はない。大正時代には帆かけ船が行き交っていた。

左上の写真のように国府台の下は絶好の風待ちポイントだった。写真の撮影者は松戸市に住んでいた徳川慶喜の弟の昭武だった。この写真は、戸定邸（昭武の住まい）でポストカードにして販売されている。

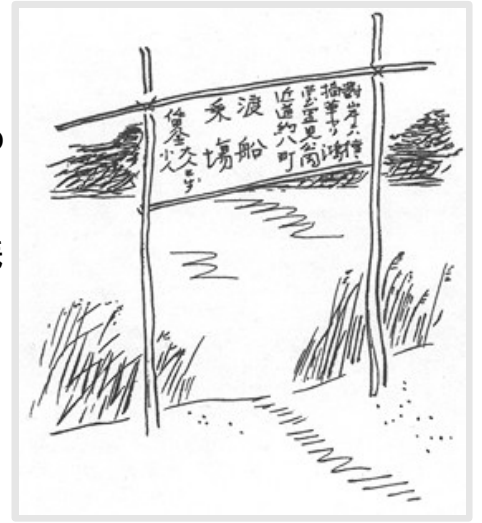
「二人は柴又の帝釈天（たいしやくてん）の傍（そば）まで来て、川甚（か

## 今週のクマ

→クマはお調子者だ。ベンチに飛び乗った勢いでテーブルに上がったところ、テーブルが揺れた。とたんに足がすくんで、へたり込んでしまった。結局、自分では下りられなかった。



→永井荷風は晩年を市川市本八幡で暮らした。散歩のついでに立ち寄った矢切の渡しの乗り場のスケッチを残している。



わじん」という家へ這入（はい）って飯を食った。》

柴又の帝釈天といえは矢切の対岸。東京都の葛飾区にある。川甚もそうだ。

現在、川甚是江戸川堤防の内側に移築され、鉄筋建てになっているが、先代舟頭さんの話によると、

「昔の川甚是川つぷちにあつてね、帆かけ舟からそのまま座敷に上がることができするように高床式になっていたものさ。荷を運び終えた帆かけ戻り船が停泊し、水夫（かこ）たちが酒盛りをしていた。いかい繁盛してたもんだよ」

矢切の渡しは、その川甚の横手の舟着き場につけていた。

先代舟頭の話をもとに想像すると、夏目漱石は矢切の渡しに乗って柴又へ渡ったと思われる。

もちろん、乗舟名簿などない。タレントのように顔が売れていたわけではないから、色紙なども残されていない。

かの永井荷風先生も矢切の渡しに乗った可能性がある。荷風の描いた矢切の渡しのスケッチが残されている。

こうして文学作品を見ると、けっこう著名人にも愛されていたことがわかる。